



171号  
2012/3/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)  
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



劉家河村の秧歌隊の練習風景 2009年3月  
ヤンガー

撮影:丹羽朋子

### ‘わんりい’ 171号の主な目次

北京雑感(62)私の北京、今何処 <sup>いずこ</sup> .....	2
私の調べた諺・慣用句7「愚公、山を移す」.....	3
媛媛讲故事(41)「郭元振、妖獣を退治する」.....	4
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より.....	6
フィールドノート(番外)「一月の南三陸町訪問だより」...7	
読む(番外)「外国人のための子育て支援会議」を傍聴して思う.....	9
中国-城市めぐり(13) 長春市.....	10
スリランカ紹介(55) 植物園・そのII.....	14
アフリカの日々(60)「ヤギのシフィ」.....	15
私の四川省一人旅(53)草原の中の街・塔公III.....	16
‘わんりい’ 活動報告「2012年新年会」.....	19
‘わんりい’ 活動報告「留学生の皆さんと料理で交流」...19	
‘わんりい’ 活動報告「漢詩の会」.....	20
留学生たちのスピーチから II 劉芸 <sup>ダイシン</sup> 績.....	21
留学生たちのスピーチから II 劉源.....	22
‘わんりい’ 掲示板.....	23

### 【表紙写真説明】

中国陝北地方の山村の春節行事は、「正月十五」と呼ばれる元宵節にクライマックスを迎えます。この日の夜に、一年の健康や幸運を祈って行う「転九曲」は、明かりを灯した361本の高粱の茎を並べて作る、迷路のような通路(九つの曲がり角がある)を皆で歩み進む民俗風習。

人々の列の先頭を任されるのは村の秧歌(中国北方の伝統歌舞)隊で、かつては隣村の隊との掛け合いも見もので、それは賑やかだったといえます。元来は収穫後の小麦畑で行ったこの活動、昨今は黄砂の環境問題から果樹栽培が奨励されて広い平地が確保できず、年々減りつつあります。そんななかで、劉家河村は毎年欠かさず転九曲を続ける数少ない村の一つ。自慢の秧歌隊は若者が多く、荒々しいダイナミックな踊りが魅力です。普段は都会の学校や村に出稼ぎで留守の若者たちは春節休み返上で広場に集い、練習に余念がありません。

ご隠居たちは「かつての秧歌隊は習わずとも意のままに舞ったものじゃがのう…」と口では文句を言うものの、孫たちの凛々しい姿を眺めるその顔は、自然と笑顔でほころびます。

(丹羽朋子 中国民間芸術研究に従事)

北京の目覚しい発展とそれに伴う街並みの変化を、寂しいと受け止める方々が多いようです。私は、「北京らしさが年々薄れてきて残念」と思いながら一方では、近代的な北京の街の便利さも楽しんでいるのです。

一番便利に感じているのは、喫茶店等、街を歩いていてちょっと休めるお店が増えたことです。以前の北京で気軽に入れるお店と言えば、「小吃店(シャオ チー ディエン)」と呼ばれる小さな食堂ですが、ここはゆっくり休むなどとんでもない。何か注文しても、コップ一杯の水も出て来ないところが殆どで、実用一点張りのお店です。一方、本格的にお茶を飲もうとすると茶芸館と言う、中国の伝統的な喫茶店がありますが、これはちょっと敷居の高いところです。

この茶芸館、お店の格・所在地などによって異なりますが、料金がかなり高いようです。一度、北京中心部の茶芸館に連れて行って貰いましたら、席料だけで60元注といわれてビックリしました。これは最初だけで、そこで買った茶葉をキープしておけば、次回からは10元か15元で利用できるのだそうですが、その茶葉もかなり高価で、安いものでも50g 600元もしました。選んだ茶葉を急須に入れ、お湯の入ったポットと僅かな点心をお盆に載せて運んできて、始めの一杯は、服务员(ウェイター・ウェイトレス)が作法に則って淹れてくれます。その後、頼めば服务员が何回でも淹れてくれますが、自分達で勝手に淹れて飲むことも出来ます。時々服务员が回ってきて、お湯を補充してくれます。

この種のお店は昔からあったそうで、清朝末期からの動乱期には、暗躍するスパイの連絡場所としても利用されたという話を聞くと、ちょっとしたロマンを感じます。中華人民共和国になって、大躍進時代にも辛うじて生き残り、文化大革命の打壊しも免れて営業を続けていたお店も幾つかはあり、現在はビジネスマンの商談の場として利用されています。

この茶芸館は街中で時々見かけましたが、ちょっと気軽に入れる雰囲気ではなかったので敬遠していましたが、実情を知って、つくづく独りで入ってみなくて良かったと思いました。それが今では、外資系・国内資本取り混ぜて、洒落た喫茶店があちこちに出来て、歩き疲れて一息入れるのに不便を感じなくなりました。

便利になった北京の街をそれなりに楽しんでいます。私には、もう一度行ってみたいと思っていた、忘れられない旧い北京のお店が有ります。2002年頃、2年

近く北京で暮らして、一旦帰国することになり、お酒の好きな友人達に、中国のお酒を何本か買って帰ろうと思いました。住まいの近くでは、便民店(所謂雑貨屋さん、後に小規模なスーパーに変身したところが多い)でお酒を売っていましたが、お土産のお酒を買うにはちょっとムードがないと感じて、お酒の好きな老人に、「お酒はどこで買ったら良いか」と尋ねました。その老人は、「名前は忘れたが、王府井の東側に大きな酒屋がある。」と言って、場所を詳しく教えてくれました。

当時は、王府井の改修工事が進行中で、周りもあちこち掘り返されて雑然としていましたが、一筋東側の通りはまだ昔のまま、歩道の石畳は凸凹ですが、街路樹が鬱蒼と繁って落着いた街並みでした。教えられたところにそのお店がありました。歩道から40cm以上も高くなったところにお店が並んでいて、目当ての店は入口に、更に30cm近い敷居があって、跨いで店内に入りました。

店内はちょっと薄暗く、右側三分の一程には木製のガッチリしたテーブルと椅子が配置され、午後の早い時刻でしたが、何組かのお客が腰を下ろしていました。正面には、奥行き半分位のところに、これも黒光りする頑丈なカウンターがあり、その向こうではお酒の燗や酒肴を用意するための人員が立ち働いていました。夕方ともなれば、魯迅の小説「孔乙己(コンイージー)」の舞台のように、立ち飲みでお酒を楽しむ人達が集うのでしょうか。店の左側は全面が棚で、いろいろな種類の酒瓶が並び、その前には薬局の陳列ケースのような(但し黒光りする木製の)台が置かれ、販売員が控えていました。

お酒を2,3種、ゆっくり説明をしてもらって適当なものを選びました。私はお店の雰囲気から酔って、良いお土産が買えたと満足して帰って来ました。本当は、もっとゆっくり店内を見て、出来ればお酒の一杯も注文して見たかったのですが、独りだったのでそれは次回に譲って帰って来ました。落着いた店の雰囲気に強く心を引かれながら。

2年後にもう一度そのお店を捜しに行くと、街並みはすっかり変わり、王府井大街と同じように整備され、歩道と同一平面で、ガラス張りの明るいけれど画一的なお店が並んでいました。あのお店があった辺りには、洒落たレイアウトの酒類販売店が有りましたが、一杯飲めるスペースは、もう有りませんでした。2年前のあの魅力的なスペースは、一体何処へ行ってしまったのでしょうか。

注) : 2000年代初頭で、1元≒13円

# 愚公、山を移す

三澤 統

私の調べた諺・慣用句 7

“愚公山を移す” という諺があります。何事も最後まで諦めずに努力を続ければ、遂には途方もないことを成し遂げることが出来るという意味合いかと思えます。

この諺は、毛沢東が第7回全国代表大会閉会の折(1945年6月)、中国共産党を愚公に例えた演説をしたことで良く知られるようになりました。

辞書では、

▲ 三大辞林(三省堂):「愚公山を移す。愚かな者でも怠らず努力すれば、大事をなしとげることができるといふたとえ」

▲ 中日辞典(小学館):「愚公移山 yùgōngyishān

愚公山を移す。いかなる難事業も地道に努力を重ねればついには成し遂げられることのたとえ」

と記されています。

この成語の出自は「列子<sup>注</sup>・湯問」の「北山愚公者、年且九十、面山而居。聚室而謀曰：“吾与汝毕力平险……可乎？”」(北山の愚公という名の90歳にもなる老人が、(自分の家の)すぐ目の前に山がある所に住んでいました。(ある時)家族を集めて言うのには“私と皆で全力で前の山を平らにしようと思うのだが……どうかね?”)の部分です。

昔、中国のあるところに‘太行’と‘王屋’という二つの大きな山がありました。その北山にもうすぐ90歳になる‘愚公’という老人が住んでいました。

彼が出掛けるときにはいつも二つの山が邪魔をして大変な回り道をしなければなりませんでした。

そこで彼は一族郎党を招集して、この山は邪魔だから皆で別の場所へ移そうではないかと提案しました。皆は一緒にやろうということになり、掘り出した泥土や石は東方の海へ捨てようと相談しました。

そして愚公は子供や孫たちと一緒に山を懸命にくずしはじめました。岩を割り、土を掘り、土砂をもっこに入れて、海をめざして運び始めました。しかし、海まで一往復するのに半年もかかってしまいます。

そんなわけで、皆で一日に掘る量はいくらかもありませんでしたが、怠けずに作業を続けました。そして季節の変わり目になる頃、皆はやっと一度家に戻りました。

これを聞いた‘智叟’<sup>ちそう</sup>という利口者の老人がわざわざ愚公のところに来て言いました。「このよう



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

なやり方は賢くは無いと思いますよ。あなたの命は限りあるのにどうやってこの二つの山を平らにするのですか？」

愚公はこれに反駁<sup>はんぱく</sup>して言いました。「あなたという人は実に考えの固い人だ。全くどうしようもありません。この私が死んだとしても、まだ子供が居るし、その子もまた子供を生むし、その子も又々子を生んで、子々孫々絶えることは有りません。しかも山は今より高くなることは無いのですから、掘り続ければ平らにならない筈はないでしょう」それを聞いた智叟は何も言い返せませんでした。

その後、山の神様が、相変わらず愚公が山を削るのを止めないのを見て、このことを玉皇大帝に報告しました。愚公の精神に深く感銘した玉皇大帝は、早速二人の力持ちの神を下界に送り、山を背負って移動させました。

これ以来、その場所には道を邪魔する高い山は無くなり、愚公が出かける時に、回り道をする必要が無くなりました。

## 〈注記〉

列子(れっし): 春秋戦国時代の人、列御寇(河南鄭州人)の尊称(「子」は「先生」というほどの意)だが、一般的には、列御寇の著書とされる道家の文献を指す。別名を『冲虚至德真経』ともいう。  
(ウィキペディアより)

唐の開元(713～741年)の頃、將軍・郭元振は、都での役目が終わり、家来たちと共に故郷へ帰ることになりました。その途中で道を失い、同じところをぐるぐる回るだけで先へ進むことが出来なくなりました。

日暮れ時に近く辺りが薄暗くなってきました。ぼんやりと前方にかすかな<sup>あかり</sup>灯が見えましたので、馬に跨って灯の見える方向へ進んで行きました。かなり時間を掛けて進んで行きますと、立派な門構えの向こうに広い庭が続く、いかにも金持ちの豪邸の前に出ました。今晚はここで宿を頼もうと思い、馬を降りて門を叩きました。しかし、何度叩いても、誰も出てきませんでしたので、門を軽く押してみますとぱっと開きました。鍵は掛けられていなかったのです。

郭元振は不思議に思いながら、庭の奥を眺めましたが、人の影はありませんでした。そこで、馬を引いて門の中に入って見ますと、ますます不可解な光景が広がっていました。廊下や母屋には灯が煌々と輝き、幾つもの食卓の上に山海の珍味やお酒が並べられて、まるで結婚の披露宴を行っている様子に見えます。しかし、人の気配が全くありませんでした。

郭元振は馬を廊下に繋ぐと、階段を上り、母屋の中を歩き回りながら、これはいったいどういうことなのかと考えました。

と、そのとき、東の部屋から、女性の泣き声が聞こえてきました。

「そこで泣いているのは誰だ？ あなたは人なのか？ それとももしや幽鬼なのか？ 母屋の食卓に美味しそうな食べ物いっぱい並べられているが、なぜ食べる人がいないのか？」

郭元振は訊ねました。

すると、泣き声が止んで、問に答える声が聞こえてきました。

「私が住んでいるこの村に、「烏將軍様」という神様を祀っている廟があります。この「烏將軍様」は村の幸せを守る神様ですが、災いをももたらすのです。毎年、「烏將軍様」は村の人々に美女を選ばせては妻とします。もし応じなければ、災いを起こすといいしますので、村の人々は災いを避けるために、毎年美女を選んで嫁がせます。私は美女ではないのですが、父は財産を増やすのに一生懸命で村人からお金を受け取り、私が知

らない間に「烏將軍様」に嫁がせることを決めました。今日の夕方、村の人たちは結婚の宴を用意して私を酔わせてこの部屋に閉じ込めた後、みんな帰りました。今は「烏將軍様」を待っているだけなのです」

郭元振はそれを聞いて、暫く考えてから言いました。

「娘が親の決めた結婚相手と結婚するのは古くから決められていることだ。將軍様の許に興入れするというのは喜んでよい事ではないのか？」

女性の声が言いました。

「あなた様はご存じないからその様におっしゃるのでしょうか、「烏將軍様」に嫁いだ女性はこれまで皆、新婚の当日に殺されてしまうのです」

郭元振はそれを聞くと、怒りに堪えかねたように言いました。

「なんということなのだ。その様なものは將軍とは言えぬ。まさしく悪魔じゃ！」

「おっしゃる通りですが、親は私をここに置き去りにしました。私は間もなく殺されるのです。私は怖ろしくてなりません。あなた様は、お声から誠実な、心の優しい人のように感じます。もし、私を救って下さいましたら、身を尽くして生涯あなた様の身の回りのお世話を申し上げたいと存じます」

郭元振は重ねて訊きました。

「その將軍とやらはいつ来るのか？」

「二更<sup>1)</sup>頃です」

「私も男だ。その男と戦ってそなたを救おう。若しかして負けるようなことがあれば、私は君と共に死を選ぶほう！」

女性は郭元振の言葉を聞くと泣くのを止めて落ち着きました。郭元振はどつかと母屋の階段に座り、女性がいう「將軍」を待つことにしました。

間もなく馬車が近づく音が響き始めますと、松明で辺りを照らしながら紫色の服を着た下役らしい男が庭に入って来ました。しかし、厳しい顔をして座っている郭元振を見ると、慌てて庭を出、馬車に乗っている自分の主人に告げました。

「丞相<sup>2)</sup>殿が奥にいらっしゃいます」

続いて、黄色い服を着た小吏が郭元振のいるところへ入って来て郭元振を見、又出て行って

「確かに丞相殿がいらっしゃいます」

と先の男と同じように報告しました。

郭元振は、‘私のことを丞相と呼んでいる。ひょっとしたら自分は将来は丞相になれるようだ。相手に勝てるかもしれない’と心ひそかに嬉しい気持ちになりました。

「そうであるか。それでは入ることにしよう」と馬車の上の主<sup>あるじ</sup>の話し声が聞こえると今度は弓や、剣などの武器を持った兵士たちに囲まれて、將軍の扮装をした威厳ある人物が入って来ました。‘烏將軍が来たのだな’と郭元振は思い、立ち上がると烏將軍に挨拶しました。

「私は郭秀才と申します。ここで会うことができ光栄です」

「郭秀才はなぜここにいるのか？」

「今日烏將軍の結婚の披露宴が開かれると伝え聞いて参上しました」

烏將軍は、

「そうか？ では一緒に座って食べるがよい」

と誘いました。

郭元振は烏將軍に向かい合って座り、話しながら食べたり、飲んだり始めました。その一方で心の中では烏將軍を成敗する策を考えていました。

郭元振は、手元の袋に切れ味の鋭い刀が入っておいりましたので、その刀を使って烏將軍を刺そうと考えました。

「烏將軍は鹿の干し肉を召し上がったことがおありでしょうか？」

郭元振は烏將軍に訊ねました。

「それは此処ではなかなか手に入れられないものなのだ」

「私は少々持ってきております。將軍に差し上げたいのですが…」

「それは、それは。有難いことだ」

烏將軍は郭元振の申し出に上機嫌になりました。

郭元振は立ち上がると、袋から鹿の干し肉と刀を取り出し、肉を切って、小さな茶碗に入れて烏將軍に勧めました。

「では、どうぞ、召し上がってみてください」

烏將軍は喜んで郭元振の方へ手を伸ばして肉を取ろうとした瞬間、郭元振はいきなり烏將軍の手を押さえ、手にした刀で切り落としました。烏將軍は「ぎゃー」と大きな悲鳴を上げると飛ぶように逃げて行きました。部下たちも恐怖に駆られ一目散に將軍の後を追って逃げて行きました。

郭元振は、烏將軍の様子を見に行くように家来に命じ、自分の服を脱いで切り落とした手首を包みました。間もなく戻って来た家来たちは、烏將軍の姿はもうどこにも見えなくなっていると郭元振に報告しました。

郭元振は女性が閉じこもっている部屋に近づくと

「烏將軍の手を切り落としました。夜が明けたら、その血の跡を追って探せば捕まえられる。そなたはもう死を免れることができたのだ。早く出て来て食事をされるがよい」

といいました。

部屋の扉が開けられると、十七、八才くらいの美しい娘が現れました。娘は郭元振の前へ進み深々とお辞儀をして言いました。

「命を救って頂き本当に有難うございました。どうか私をあなた様の召使いとしておそばに居させて下さいませ」

「いや、私は旅人なのだ。それは出来ないことなのだ」

郭元振は固辞しました。

ようやく夜が開け、郭元振が烏將軍の手首を包んだ服を開いて見ますと包みの中にあつたのは、なんと、人間の手首ではなく豚の足でした。皆が驚いていると、庭の外から泣き声や人々の声<sup>が</sup>が<sup>や</sup>が<sup>や</sup>と聞こえてきました。見ると、娘がもう死んでいると思っている親や親戚、村人たちが柩を担いでやって来ています。

人々は娘がまだ生きていたので吃驚し、その事情<sup>わけ</sup>を娘に訊ねました。しかし、郭元振が烏將軍の手を切り落とした話を聞くと、村人たちは喜ぶどころか怒り出し、郭元振に詰めよりました。

「烏將軍はこの村を守る神様だったのだ。皆で長い年月拜んできたのだ。毎年村の娘を嫁がせたからこそ、村民が平安に過ごすことができたのだ。あなたが烏將軍に乱暴したり、怪我を負わせたりしたら我々はどうなるのだ。我々はあなたを殺して烏將軍に供え、烏將軍のお裁きを待たねばならない」

郭元振は皆が口々に言うことを我慢して聞いた上で説得しました。

「みなさん、私が退治したのは妖獣なのだ。考えてごらんさい。本当の神とは天帝から派遣され、民の幸せと安全を守るはずだ。しかし、この將軍は毎年、村の娘を殺し続けているではないか」

そして、郭元振は豚の足を皆に見せると続けて話しました。

「烏將軍が本当の神様なら豚の足をしていることがあろうか？ それだけでも明らかに妖獣だということが分

かろう。私は正義の為に最後まで戦うつもりだ。どうか私の話を信じて欲しい。若し妖獣を退治できれば、これまでのように毎年村の娘を犠牲しなくて済むのだ。それが、本当の幸せではないのか？」

人々は郭元振の説得にやっと納得し、郭元振は百人ほどの人々に槍、弓矢などを持たせて血の跡を辿って行きました。十キロほど進んだところで大きなお墓に行き当たり血の跡はそこで消えていました。

「ここだ！」と郭元振は人々に墓を囲ませ、墓を掘り始めました。すると間もなく墓の中から大きな洞窟が現れ、松明を燃やして奥へ投げ込んで見ますと、その中に、左の前足がない巨大な豚が、血にまみれて倒れていました。豚は、火と煙に責められて洞窟から抜け出ようとしていましたが、人々が武器で一気に殴りつけ、間もなく死んでしまいました。

村民たちは大変喜び、お祝いの宴会を催し、お金を出し合って、そのお金をお礼として郭元振に差し出しましたが、彼は受け取りませんでした。そして「私は民のため害を取り除いただけだ。獵をしてお金を得たりはしない」と述べました。

郭元振がいよいよ村を離れる時が来ました。救われ

た娘はどうしても郭元振に付いて行きたいと両親に自分の本心を告げました。

「私は父上母上の許に生まれて幸せでした。深く感謝申し上げます。しかし、父上母上はお金と引き換えに私を烏將軍に差しだしましたので、私は父上母上に尽くすべき義理がなくなりました。郭様がおいででなければ、私は既に死んでおります。ですから父上母上は私が死んだものと思召してくださいませ。私は、郭元振様のところで新しく生まれるのです。今後、私は郭様に従って生き、古里はもう忘れることにします」

娘は涙を流しながら、両親にお礼の言葉と共に別れの言葉を言いました。

郭元振は自分には既に妻がいること告げ、娘が思いとどまるように説得しましたが、娘の意思は固く、結局郭元振と一緒に旅立ちました。

娘はその後、郭元振の側室になって、数人の子どもに恵まれたとのことでした。

#### ● 注釈

1) 二更：夜9時～11時

2) 丞相：大臣。

### 松本杏花さんの俳句

### 「千里同風」より

#### 一面の菜花や遠くの海は紺

guǎng mào cài huā tián  
广袤菜花田

jǔ mù tiào wàng quán càn càn  
举目眺望全灿灿

yuǎn chù hǎi zhàn lán  
远处海湛蓝

季语 才华，春。

赏析 鲜艳夺目的菜花，清澄碧蓝的大海，构成了一幅美轮美奂的图画。黄和蓝都有了，读者眼中是不会不调和成那绿叶葱茏的世界吧！



#### 涅槃雪幾度も拭ふガラス窓

niè pān xuě jǐ dù wuō fēn fēn  
涅槃雪纷纷

mè mèi cā shì qì fēn hén  
妹妹擦拭气氛痕

bō lí chuāng lín lín  
玻璃窗粼粼

季语 涅槃雪，春。指涅槃会时节下的雪。涅槃会是将阴历二月十五日作为释迦人灭之日，纪念其逝世而举行的佛教法会。

赏析 仲春，天气已经回暖，可这时却下起了春雪。因温差原因，室内雾气升腾，玻璃窗模糊起来——这是表象。我们应该感悟到，作者的心灵之窗——眼睛大概也湿润了吗。此首诗作将俳句的象征性发挥得十分完美，遑人叫绝。

2012年1月下旬、再び宮城県南三陸町を訪れました。今回は、仮設住宅での新たなコミュニティ作りを支援しているNPOコレクティブ・ハウジング社の方々に同行して4つの仮設住宅をまわり、それぞれの集会所で手仕事や郷土料理を作りながら、これからの暮らしを考える活動のお手伝いをしました。

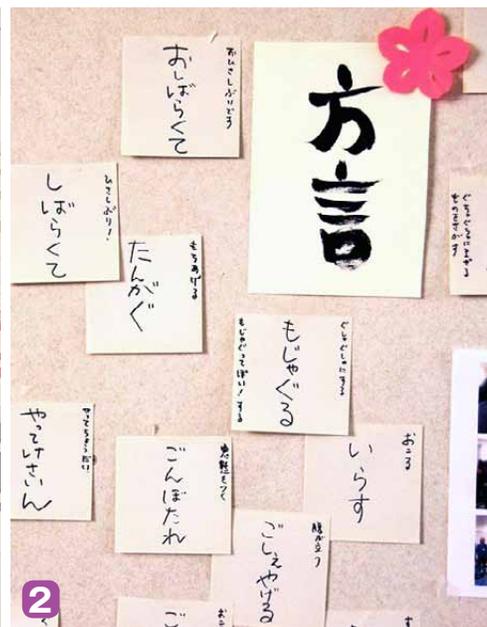
 「ここに小さな南三陸町をつくらう」

南三陸町に隣接する登米市にある南方仮設住宅は、300世帯ほどが入居する南三陸町市の最大規模の仮設住宅のひとつ。入居者は甚大な被害を受けた市の海岸沿いの中心部、志津川地域の方々が中心です。前回ご紹介した「きりこ」を作っておられる上山八幡宮の工藤宮司さんご一家もこの仮設住宅の住人です。集会所では宮司さんの娘さんである真由美さんを中心に、女性たちや男性のお年寄りたちが布小物や、紋切り遊び(日本の家紋を切る伝統的な遊び)をつかったコースター作りなどを楽しんでいます(写真1)。

一戸あたりの空間が狭く、被災前は面識のない人々が隣人として暮らす仮設住宅の生活では、みなが集まって交流する場を創ること自体が、孤立する方を出さないだけでなく、今後の復興に向けて率直に話し合う土台づくりのためにもとても重要であると感じます。

みなさんが作った手仕事の品々を拝見しているうちに、こんなお話が耳に入ってきました。「南三陸町の仮設住宅の中で、この南方住宅だけが離れた市外に位置しているため、復興に向けた動向の情報が届きにくく、取り残されたようで不安になる。」「今までと違って海から離れたこの仮設に半年住んでいると、今後、南三陸に戻ってどう暮らしたいのかを想像しにくい。」「狭い仮設ではお正月料理や〈きりこ〉を飾るような気にならない」……。

そこで急きょ、土地の方言を皮切りに、季節の行事や郷土料理など、かつてあった暮らしを思い出して紙に書いて集会所の壁に貼り、それについてよそ者の私たちに教えるというかたちで、おもいつくままに語ってもらう会を開きました。せっかくなので、前回の訪問の際に撮影した写真



① 切り紙はお裁縫が不得意な人も、男性陣もできると人気の(?)紋切り遊び。「みなさんありがとう、みなみさんりく」という手書きの文字が添えられたコースターは、支援を下された全国の方々のお礼に渡すのだそう。

② “もじゃぐる”は「くしゃくしゃに丸める」、「やってけさいん」は「やってちょうだい」頼むときに使う、「きしゃすね」は「悔しい」…と、表情豊かな言葉がたくさん!

仮設住宅の集会所の壁に「小さな南三陸」増殖中。



他の仮設住宅では、女性たちが集まって、古布を組み合わせて刺し子のコースターづくり。漁師の男たちが酷使する仕事着を幼いころから繕い物してきた奥さんたちは、驚くほど刺す手が早く、布の柄に合わせた自由な刺し子のセンスも抜群。

4 もいっしょに壁にコラージュしていきま  
す(写真2)。

「うちの方はその  
道具は違う言い方で  
呼ぶ。」

「我が家はそれに  
味噌は入れないよ。」

「うちの方のきり  
こは魚の形はない  
ねえ、農家が多い山  
側だから海の方とは  
違うんだねえ」…

言葉も食べ物も、  
海と山、元住んでい  
た場所がちょっと離  
れると違う。自分の  
暮らしを思い出すの  
と同時に、たくさん

の地域から寄せ集まった人たちが集うこの仮設住宅だからこそ、南三陸町のなかの多様性がみえてくる。(小さな集落によっては、集落単位で元の居住地のすぐ上の高台の平地の仮設住宅に集団移動したケースもある。)

壁にたくさんの言葉が踊り始めた頃、真由美さんが墨と筆をとって、「南三陸町の暮らし」と大きく書き始めました。「ここに少しずつ、この仮設に住む人たちみんなで、ちいさな南三陸町を作っていきたいと思います。」味わい深い題字が掲げられ、皆で壁に作った言葉とイメージの即興コラージュは常設にすることが決まりました。かつての暮らしを思い出して共有する、このささいな楽しみと交流が、住み手たちが徐々に自分たちの未来の暮らしのあり方を考えていくきっかけになることを願って、真由美さんは筆で「では、これから—」と書かれた小見出し

をコラージュの右端に貼りつけました(前ページ写真3)。

最後は壁に貼られた「食べ物」の言葉のなかから、「たらす焼き」を選んで皆で作って美食!味噌と砂糖を加えた分厚いクレープのような優しい味のおやつに舌鼓を打ちつつ、思い出話に花が咲きました。これから、この壁に住人達がどのような言葉や写真を貼り加えて、一人一人の“南三陸町”と出会い、創っていくのか——、私自身も引き続き心を寄せていきたいと思います。

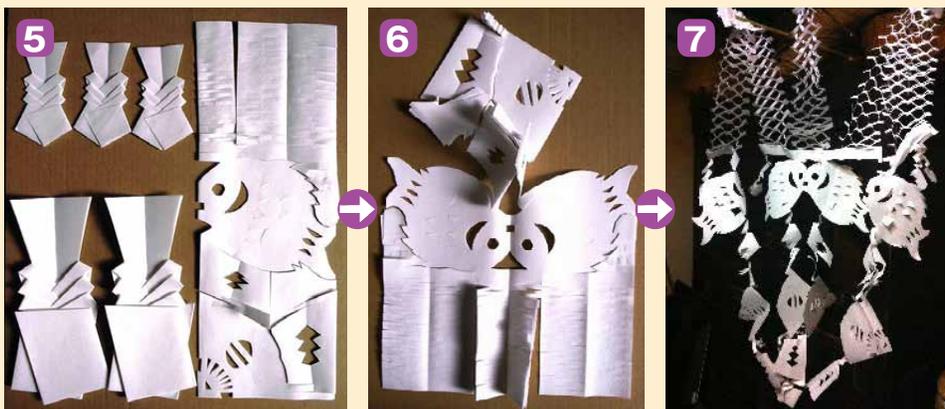
季節に応じた様々な行事や祭りによって人々や大地が結びつき、「きりこ」や竈神さまを飾ってヒト以外の存在を受け入れ、豊かな自然と共存してきたこの地域の暮らし方。家も町もかつての形を失ったこの場所が復興するとき、急ぎ足するあまり、どこでも同じような四角い建築物が並ぶ“のっぺらぼう”の町並みにならないことを祈ります。お正月を迎える時期になって初めて、オカザリを飾る場所、郷土色豊かなお料理を作ってみんなで集って食す場所…家にそんな場所があることの大切さに(それが今ないことによって)思い至る。

「震災があったからこそ、自分たちの地域の暮らしの良いところを見直し、それを観光資源にもできるような新しい街づくりができた」という流れに向かうことができれば、とこの地を訪れるたびに思います。

### 上山八幡宮のオカザリ(きりこ細工)

「昔から雪国の人々は春待つ心をこめて年棚を美しい切紙細工で飾るのをならわしとしてきた。(……)オカザリは、いわば雪に埋もれた暮しが育んだうるわしい民俗の花である。陰鬱な冬ごもりの中で春を待ち望む、せつないほどの思いがそこにはこめられている。天窓からわずかに差し込む光にオカザリの白さがどれほど華やいだ彩りとして映るか、それは気の遠くなるような永い雪国の冬を実際に経験した人でなければわからない美の世界かもしれない」(熊谷清司『日本の伝承切紙』、1981年より)

### 「えびすの幣」



5 4枚に折り畳んで切った本体と、3つの小さな幣束を合わせて組み立てる。(左下の2枚の大きな幣束は別で飾る) 6 組み立て途中。自分で手で動かしてみると、この立体的な切紙の精巧さと仕掛けの見事さに驚く! 7 3本の竹棒に刺して完成。揺れる影も美しい。

宮城や岩手の神社を中心に残る、お正月のオカザリとして飾る切り紙細工(きりこ)は、当初は「法印」(土着の山伏や修験者)の手による摩訶不思議な形=技巧として崇められ、場所から場所へと移動を常とした修験者たちの収入源でもあったといえます。明治時代の神仏分離の後、法印が神職や寺の住職となってこの習俗を残し、今でも海の仕事、山の仕事、商家…と地域や氏子に合わせて、多様なかたちのオカザリが作り

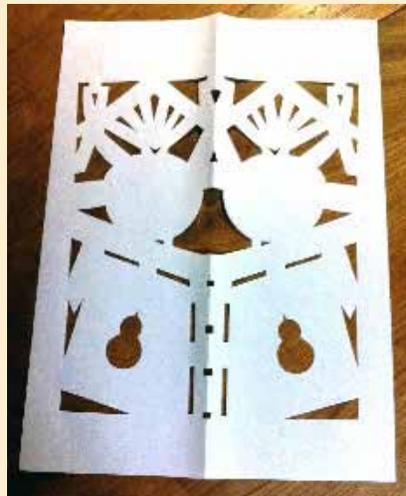
出されています。

前回の訪問時に取材させていただいた、南三陸町の上山八幡宮のきりこもまた、神職さんが一枚一枚、手作業で切り、組み立てていく素晴らしい切紙細工です。私も組み立てにチャレンジさせていただきました。

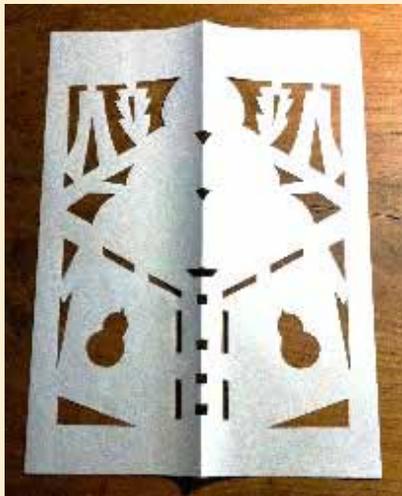
◎今回、「きりこをより多くの方に知っていただき、残していきたい」という工藤宮司さんのご好意で、数セットお譲りいただきました。頒布ご希望の方は、丹羽までお問い合わせください。

【連絡先】e-mail:info.yixinshe@gmail.com ☎080-5080-5220

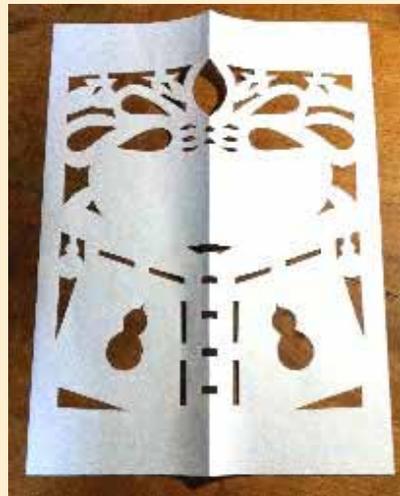
### 〈切透かし〉



餅



宝袋



御神酒

読む (番外)

## 「外国人のための子育て支援会議」を傍聴して思う

真中智子

某市が主催した「外国人のための子育て支援会議」を傍聴した。この会議は、市内に住む外国人の子育ての現状を把握し、外国人の子育て支援及び国際交流の推進に資するため、設置されたという。会議での検討内容は、市長へ報告され、施策に生かされるのだろう。会議には、外国人ママ、日本人ママ、子育て支援活動をしている市民、市の職員が参加していた。

全4回行われた会議のうち、傍聴したのは最終回で、外国人保護者が困っていることが報告された。抜粋して挙げると、

- ①日本の子育ての価値観や文化の違いに戸惑う
- ②子どもに母語や母文化を伝えたいが、日本では難しい
- ③子どもが日本語を覚える速さに親がついていけず、親子の共通の言語でのコミュニケーションが難しい
- ④母親同士の口コミによる些細な情報を入手できない
- ⑤地域に相談できる人がいないなどなど。

それらの課題に対して、市職員が行政の取組みを紹介し、不足している支援については、今後の検討の余地を残して、会議は終了した。

この会議を開催した意義は大きいし、評価できる。た

だ、自治体だけで外国人家庭の支援を行うのは無理があると、会議が進むにつれ感じずにはいられなかった。会議の総括でも「地域サポートも重要」と、地域の力を借りる必要性について述べられている。

そもそも「支援」という言葉は「支援する側」と「支援される側」と双方が分けられたような誤解を招かないだろうか。手元の広辞苑第四版では「支援」を「ささえ助けること。援助すること。」とある。でも、きっと必要なのは「ささえ合い、助け合う」ことだ。

日本に来ている外国の方は、日本語を勉強し、海を渡って来てくれた、日本と縁のある貴重な人たちだ。彼らが、日本で暮らし、日本を好きになってくれることが、「国際交流の推進に資する」根幹部分。例えば誰かと信頼関係を築くとき、そこには自分が助けてもらっていると同時に、自分も相手に必要とされているという実感があるはずだ。その信頼関係は、「支援」という言葉ではくくれない。

傍聴しながら、わんりいの活動が思い出された。当会議では、和食を作る交流会が紹介されていたが、わんりいの講座は、逆に外国のことを教えてもらうことが多い。そういえば、活動で教わったグリーンカレーは、当時の私の勝負レシピだった(これしか作れなかった)。

(真中智子)

長春市は、よく知られているように東北三省の一つ吉林省の省都である。私の「都市めぐり」シリーズでこの都市を取りあげようか、どうしようかと迷ったが、やはり自分の目で見た長春市を書いておこうと思った。一定年齢以上の日本人は長春と聞けば「満州国」あるいは「新京」を連想し、ある意味のノスタルジアを感じる人も多い。しかし現在の中国では「満州」という言葉は好まれないようだ。

私が逡巡したのは、長春市を書く時、「満州国」を抜きには語れないし、どうしても日本人の立場や見方で書くことになるうし、その場合、この文章を読んで気を悪くされる中国人の方々も多かろうと思うからだ。

しかし、あえて誤解をおそれず書き進めてみたい。それが真の日中友好にも資することになるのではと期待している。戦後も67年目を迎えて世代交代が進む中、昔の歴史を知らない人が年を追う毎に増えてきている。そうした世代のためにも、少しでも歴史に関心を持っていただきたいという気持が一方である。奇しくも今年は、満州国建国80周年、清朝滅亡100周年の年に当る。この文章を「日本人にとって満州国とは何であったのか」を頭の中で問いかけながら書いている。

私の浅い歴史認識が間違っていることもあると思うが、その部分をご叱正いただければ幸いである。なお長春市及び中国東北地方(旧満州地方)についての理解をしやすいするため、別掲の年表を作った。長春市について書いているので、長春市に関連する出来事は多く記入した。

2000年春、清明節休暇を利用して長春に行った。長春には当時の満州国時代の建物がたくさん残っているとガイドブックに出ているので、満州国とはいったいどのようなものだったかを知りたいと思ったのだ。別の本に「満州国は当時の日本人にとってかけがえのない夢と希望をもたらした。建国から都市計画・経済政策まで日本人が舵を取って“五族協和”の旗の下、国家運営された」と出ている。

当時の中国からすれば大きなお世話であろうが、別表の年表にあるように中国国内は各地でいろいろな政権が乱立し、バラバラの状況で諸外国の侵略や干渉に何もできなかった。その時から、時がずいぶん流れているので当時の状況からはかなり変化しているであろうが、何においてもこの目で見るのと本で読むのとでは大きく違うものだ。

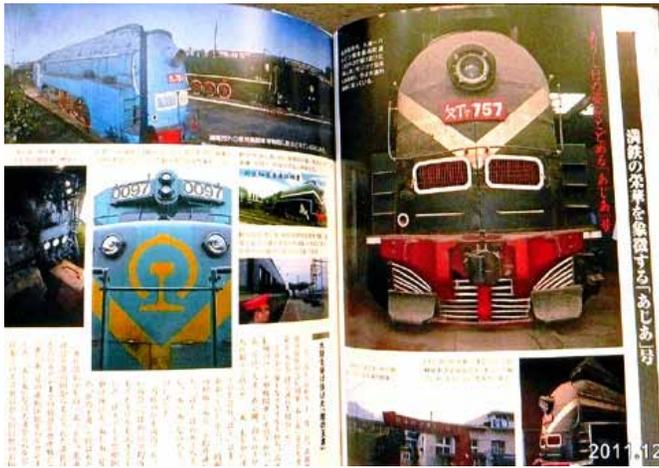
4月3日、22時7分に大連駅を出発するT5307という記号の特快寝台列車に乗り込んだ。Tは特急列車の意味だ。乗ると寝台は作られていて、すぐ寝るだけなのだが、その前に歯をみがいて顔を洗おうと思い洗面所に行くと、特急なのにあまり清潔そうでない。水の出も悪く、トイレの床がぬれていてお世辞にもきれいとはいえない。歯をみがきすぐ横になった。満鉄(南満州鉄道)時代の列車は明るく清潔感に溢れていたと私の読んだ本には書いてあるが、いつから特急なのにこの程度の列車しか走らなくなったのであろう。長春駅には翌朝6時前に到着した。

大連から長春までの距離は約700kmであるが、これを8時間弱要したことになる。汽車賃は264元であった。別表の年表に記入しておいたが1934年にこの路線に特急「あじあ号」の運転が始まり、8時間半かけて走っていた。停車駅がいくつあったのか分からないので単純比較はできないかも知れないが、急行「はと号」は12時間かかっていたというのだから「あじあ号」は当時としては驚異的なスピードであった。私はこの「あじあ号」が好きである。写真でしか見ていないが、重量感とスピード感あふれるデザインである。動輪の直径も2mという巨大さである。編成は7両編成で食堂車もついており人気を呼んでいた。今から80年近く昔(昭和8年)の話なのに客室も冷暖房完備だったというから驚きである。鉄道ファンならずとも疾走する姿を見たいものだ。

さてホームに下りると、そこに現地ガイドの宮<sup>ミヤ</sup>さんが立っていた。旅行会社から何号車に乗っているか連絡してあったからだ。日本人専門のガイドらしく日本語は上手である。先ず朝ごはんを食べようということになり、何が食べたいかと聞くのでおまかせしますというと、「少し歩いたところに自分が時々利用する店がある」と言うのでそこに向う。着くとおかゆ専門店である。

日本で“おかゆ”といえば病人食のイメージがつきまとうが、ここの店は、ざっと数えても10数種類のおかゆがそれぞれのなべに入れて置かれている。勿論マントウやギョーザなどもある。おかゆは何種類でも食べられるが、そうはいつでも朝からたくさん食べられないので2種類食べてみた。結構おいしいのである。ちょっとしたおかずもあって、日本でもこのようなお店があれば繁盛するのではと思った。

料金はとても安い。ガイドの分を入れても20元もしなかった。食事しながら今日一日の行程の打合せをする。



アジア号

日時	「1914年10月1日、長春に日本国が建設した最初の鉄道が開通した」	資料	藤田浩吉氏
日時	「満洲国成立からみた長春の発展史」	資料	安田守顕氏 資料 杉本祐生氏
日時	「長春のルーツをたどる」	資料	安田守顕氏 資料 石上七郎氏



取り壊された長春駅

というのも今夜の22時20分発の特急寝台列車に乗って大連に帰るので、丸一日しか長春に滞在できないためである。ガイド料は1日300元なのでここで渡した。

朝まだ早く、どの建物も開いていないので、タクシーに乗って南湖公園に向う。この公園の面積は222ヘクタールもあり、その中に南湖という大きな湖がある。南湖は1937年に長春市内を流れる伊通河の幾つかの支流をせき止めて造られた人造湖である。この公園は満州国の都市計画に沿って造られており、木々は高く豊かで湖の中には浮島があり、そこに橋が伸びている。長春市は緑が豊かな街でその中核をなす公園である。

長春市の都市計画は1932年に満州国が建国後、正式にスタートした。荒野の中に1914年に完成した重厚な装いの長春駅(ロシアが造った長春駅は今の駅から1km北西にあった。1914年に日本が造った長春駅は近年取り壊され、デザイン的にもあまりパツとしない現在の駅に建て替えられてしまった)の前に直径180mの円形の広場をつくり、そこからまっすぐ南に延びる大通りを背骨として、左右に斜めにつき抜ける幹線道路を設けた近代的な街造りを始めた。この大通りは「長春大街」と命名されたが、これが今の「人民大街」となった。中国は通りの名に「人民」をつけるのが好きで大都市の主要道路には必ずといっていい程この名のついた道路がある。大連市

でも一番のメイン通りは「人民路」である。

大連はロシアが街づくりをしていたものを日本が引き継いで完成させた街だが、長春は日本が国都建設5カ年計画に基づきヨーロッパ風の当時としては素晴らしく近代的な街づくりを始めた。街の骨格は前述の通りだが、大きな通りは全て舗装され、電柱は撤去された。私は日本の風景は美しいと思うが、どこに行っても電柱が地面から伸びており、空には電線が縦横に我が物顔で張りめぐらされ景観をそこなうことおびただしい。ヨーロッパの国々は電線の地中化率が100%に近い国が多いが、日本はまだ全国平均で2~3%台であり、残念ながら日本人の美意識は欧州諸国よりかなり劣る。わが町田市も現在2%に遥かに届かない。

また市街地には水洗トイレの設置を進めている。東北地方でいくつか日本が造りあげた石積みの大きなダムを見た。飲料水、農業用水などを供給できるようにするなど水に関するシステム化も驚くほどである。日本で水洗トイレが普及するのは、戦後かなり経過してからである。いかに満州国は理想的な国造りを進めていたかが伺える。

ところでなぜここまで巨費を投じて他国の地に理想郷を造ろうとしたのだろうか。当時の参謀本部は、「まず親日的な政権を樹立し、次に独立国家とした上で、将来は日本に併合する方針」だったものの本には書いてある。満州国は建国されたが、この国には基本となる憲法や国籍法がなかった。なぜなら国籍法が施行されると満州国に住む日本人は満州国人となり日本国籍を失うという理由からだったようだ。しかしいずれ併合するのであれば関係ないとも思われるが、よく分からない。いずれにしても、日本の独走に反対する国際世論は年を追う毎に厳しくなる中で他国の地に強権をもって打ち立てた憲法もない国は、所詮は適わぬ夢であった。

話が横道に逸れたついでに長春の街の歴史を簡単にみてみよう。この都市が歴史に登場するのは、1800年に清朝が「長春庁」を設置した記録から始まっているとどのガイドブックにも出ている。この役所がどの程度の規模でどのような位置づけであったのか定かではないが、ロシアが鉄道を敷設して歴史の表に少し顔を出したということだろう。しかしロシアはハルピンと大連の開発が手いっぱいである。長春は田舎の街のままであったようだ。1905年日露戦争に日本が勝利し、長春以南を手に入れ長春ヤマトホテルや長春駅を造ってから街の様子は徐々に変わって行った。大転換は前出の通り、満州国成立と長春が首都となり、名前も「新京」と改めてからである。

話を元に戻し、南湖公園にまもなく着いたが、4月上旬のためか天気はいいがとても寒い。長春市の冬季は

平均気温がマイナス12℃(1月だけではマイナス16℃)というから大連より更に寒い。ジャンパーの襟を立てながら歩く。朝早くから多勢の人が出て太極拳をやったり、集まっておしゃべりをしたりしている。市民の憩いの場であるようだ。湖畔を北西の方向に歩くと大きな記念碑が見える。長春解放記念碑だそうだ。

中国国内を旅行すると、何の意味か外国人にはもうひとつ分からない巨大な碑があちこちに見られる。〇〇解放記念碑とか抗〇記念碑とか洪水等自然災害に立ち向かった〇〇勝利記念碑(中国人は何かにつけて「勝利」が好きである。これに対し日本人は自然に対し畏敬の念があるので「勝利」という言葉は使わない)などがよく目につく。

自然災害の克服の記念碑は別として、その他は諸外国から解放されたり、諸外国に抵抗したことを称賛して、民族意識を鼓舞するためと思われるが、逆の見方をすれば、小さい国なら結構だが、あれほどの歴史ある大国が侵略されたり、自由を奪われていたことを示すのだから「当時はこんなに弱い国でした」ということを示していることにもなる。私が中国の国家主席であれば、このような碑は建てさせない。反日教育の目的で各地に記念碑や記念館をつくらせた国家主席がいたが、旧日本軍の行ったことは到底正当化できないし、それへの反発は充分分かるが、前向きな取組みとはいえない。

歩くうちに満州国当時の建物が立ち並び緑地帯もたっぷりあってある「新民大街」(旧順天大街)という通りに出る。どの建物も威風堂堂として貫禄がある。当時の関東軍の意気込みが十二分に現れている。いくつかの代表的な建物についてコメントしたい。

## 1 国務院旧址

満州国の最高行政機関である。外から見ると日本の国会議事堂によく似ているなと思っていると、やはり国会議事堂を模して造られたという。1936年に竣工した。

当時は地下道で長春駅や後述する関東軍司令部とつながっていたが、満州国崩壊後は埋め戻されたのであろうか。やはり将来の戦争を予測していたのであろう。国務院の正面の広い前庭には銅像が立っている。誰だろうと近くで見れば「白求恩」(1890～1939)と書いてある。

ガイドの説明ではベイチューンという名のカナダの外科医だという。白求恩はベイチューンの音を中国語にあてはめたものだ。彼は共産党員で抗日戦争が始まると、医療団を引率して中国に渡り従軍したようだ。他の所でも彼の名前を聞いたことがあるが、中国では外国人の銅像は、他では見たことがないので破格の待遇なのであろう。

この建物は、現在吉林大学基礎医学院として使われて

いて、観光客は1階部分しか見学できない。近代的な街づくりを目指しただけあって、オーチス社製のエレベーターが設置されている。動いてはいないが見学することはできた。オーチス社は1853年に設立されたアメリカの会社で世界最大のエレベーター会社である。

当時満州国に対して厳しい目を向けていた(リットン調査団に当時国際連盟に加盟していなかったアメリカも調査団員を派遣した)アメリカは、オーチス社のエレベーターの輸出はなぜか許可したわけだが、商売は別ということか。また当時の同盟国イタリアから寄贈された大理石の階段や菊の紋章も当時のまま見学でき、その頃を知る人には懐かしく思われることであろう。なお満州国の紋章は五弁ある花の形をしていたが後日それは満州の名花である蘭をデザインしたものと分かった。

## 2 軍事部旧址

新民大街をはさんで国務院の向いがわにある。5階建ての「く」の字に見える建物の角に瑠璃瓦の三角屋根を乗せた奇抜な建物である。

1935年の竣工で、満州国の軍務や徴兵を司る機関で満州国軍の最高司令部であった。かなり広々とした公園である文化広場にも隣接しており、周囲にさえぎる建物がないのでこの広場を散歩していても遠くからその威容が望まれる。現在は吉林大学白求恩医学部付属第一臨床医学院として活用されている。

## 3 地質宮

満州国皇帝の宮殿として1938年に建設が始まったが、第2次世界大戦に突入したため日本の財政が逼迫し、1944年に工事は中断未完成のまま敗戦となり中国に引き渡された。

横に長い4階建ての建物に鳳凰が左右に羽根を広げたように緑色の瑠璃瓦の大屋根が乗っていて、いかにも皇帝の宮殿にふさわしい建物である。今は吉林大学の地質学院の校舎となっている。この1階の一部は「地質宮博物館」となっており、10元の入場料を払って中に入ると、各地の名石が展示されているコーナーや化石のコーナーがあり、その奥には本物の恐竜の骨格が展示されている。地質宮の正面は文化広場でいわば皇居前広場といえよう。

障害物がないので何十と連なったタコあげをしている人が何人もいた。地質宮の正面の階段の上からながめると、国務院や軍事部旧址が遠くに緑に囲まれるようにして見え、私が思うにはここが一番長春市らしい風景ではないか。

## 4 旧関東軍司令部

満州国の実質的な支配を行ったところである。名古屋城の天守閣を模して1934年に建てられたが、一際この街



白求恩像と国務院



地質宮(後方建物)と老子(?)

では異様な雰囲気をかもし出している。現在は中国共産党吉林省委員会が使用しており、入口の左右には軍人がいかめしい顔をして立っている。

この建物は新民大街から少し離れており、新発路という大きな通りに面している。入口側は歩くことはできず、道の反対側から皆ながめている。一人の観光客がカメラに納めようとかまえたところ、途端に歩哨がその観光客を指さし大声で注意した。人には見せられないものがあるのかどうか知らないが、写真を撮ってはいけないらしいのである。何の理由でどなったのか全く理解できないが、その見幕に押され、観光客は写真をとるのをやめた。私もカメラをバッグに入れた。共産党の権威は、このような外形的威圧によって支えられているようだ。

後日、大連に戻ってガイドブックをよく読むと、「正門真正面からの撮影は歩哨に止められることが多い。無理に撮影するのは避けよう」とご丁寧に書いてあった。

満州国には、日本の省に相当する「八大部」といわれた建物(役所)があった。先にあげた軍事部をはじめ、交通部、興農部、文教部、司法部、經濟部、外交部、民生部である。ちなみに八大部は、清を興した満族の統治方法も参考にしているといわれている。清朝の兵制も「八旗」であるが、それと関係があるかどうかは知らない。大半は今では吉大学の学校施設となっており、満州国の行政組織は大学のキャンパスとして生れかわったのである。 (次号に続く)

西暦	「満州国」での出来事	参考事項
1905	日露戦争終結。満州におけるロシアの利権を獲得。(長春以南の東清鉄道線が日本に譲渡)	
1906	南満州鉄道(株)設立。(以下満鉄という。設立当時本社は東京。初代総裁は後藤新平)	
1907	満鉄本社は大連に移転。	
1908		西太后没す。溥儀(3才)が宣統帝として即位。
1909	長春ヤマトホテル竣工。	
1911		辛亥革命
1912	(大正元年)	・ 中華民国・南京臨時政府成立。孫文が臨時大統領になる。 ・ 宣統帝退位。清朝滅亡。
1914	長春駅竣工。	第一次世界大戦始まる。日本山東半島に上陸。
1917		孫文・広東軍政府を樹立。
1919	日本は長春に関東軍司令部設置。	
1924		溥儀・紫禁城を追放され、日本大使館に亡命。
1925		孫文・北京で急逝
1926	(昭和元年)	張作霖北京で軍事政権樹立
1927	急行「はと」号運転はじまる	・ 蒋介石、南京に国民政府樹立 ・ 南昌起義
1928	張作霖爆殺される。(瀋陽)	
1931	満州事変勃発	
1932	満州国建国。長春を「新京」(首都)と改める満州国としての首都建設計画がスタート。	
1934	溥儀・満州国皇帝に即位。大連～新京間の満鉄線全線複線化。特急「あじあ」号運転はじまる。	
1936	国務院竣工。	西安事件
1937	満映(現・長春電影制片廠)設立	日中戦争勃発
1945	溥儀の退位式。満州国崩壊	日本敗戦(この時の中国は中華民国)
1946	日本人の帰国開始。建物・諸構築物は中国が没収。空き家となった住宅は中国人に支給される。	
1948	長春解放。	

前回は小規模な植物園としてスパイスガーデンの話をしましたので、今回は大規模な植物園の話をししましょう。

手元にある「〇〇の歩き方」の最新刊11～12年版(以下11年版)を見ると「ペラデニヤ植物園」と「ハッガラ植物園」の2か所の植物園がindexに記載されています。面白い事には手元にある同誌の94～95年版(以下94年版)にはもう1か所「ヘナラシゴダ植物園」というのが載っています。記載されている文章を読むと、他の2か所の植物園はキャンディとヌワラエリヤという高地にあり、ヘナラシゴダ植物園はスリランカで唯一低地にある植物園なので、他の2か所に比べるとよりいっそう南国的な植物が多い、と書かれています。

3か所しかない大規模な植物園のうちの一つで、且つ他と違う特色が有るならば貴重な場所かと思いますが、周囲には観光資源が何もない事から外されたのでしょうか。何時から外されてしまったんだらうかと思い、同誌の02～03年版(以下02年版)を見ると既に外されています。ちなみに、スリランカで発行された地図には同植物園は今でも記載されているので植物園自体が無くなったという訳ではないようです。

先ずはこの「ヘナラシゴダ植物園」を紹介しましょう。コロンボから国道1号線(キャンディロード)を30kmほど車で進んだところにあるガンパハという町の郊外に「ヘナラシゴダ植物園」があります。94年版によると、1876年に英国によって王室庭園として造営されたとありますから歴史的な価値もありそうです。広さは15ヘクタールあり、ブラジル、中国南部、ジャワ、マレーシアなどから植物が集められ、貴重な物も含まれているそうです。

94年版によると当時の入場料は大人がRs.(スリランカルピー)100となっています。僕が赴任する少し前ですから当時の物価に比べると結構な値段だったと思います。記憶では、現地の人達が食べていたランチパック(もちろんカレーです)がRs.20ぐらいで紅茶は1杯がRs.5ぐらいでした。ガンパハは運転手のウダヤ君の住んでいる町で、ウダヤ君は毎日此処から満員バスを乗り継いでコロンボまで通勤していました。住んでいたにもかかわらず、ウダヤ君は地元の植物園をそれほど大した物だとは考えていなかった様です。

何故かと言うと、僕はウダヤ君と一緒にキャンディへの行き帰りに数えきれない程何度もこの町を通過していたのに、ウダヤ君からは此処の植物園に関しては一度も聞いたことが無かったからです。しかも、次回に紹介予定の「ペラデニヤ植物園」には何度もウダヤ君の運転する車で、お客様をお連れした事があったので、地元の植物園を思い出す機会は何度もあったのにです。したがって、僕は「ヘラ

ナシゴダ植物園」を訪問したことがありません。今回この話をしなければ、これから先も知らないでいた場所でしょう。機会があれば是非とも訪問したい場所の一つです。

次は「ハッガラ植物園」を紹介しましょう。この植物園は紅茶の産地として、最近では高原リゾート地としても国外でも有名になってきたヌワラエリヤの中心部からキャンディとは逆方向の西海岸へ向かって約10数kmほど下ったところにあります。

此処には何度か行ったことがありますが、植物に関してはあまり印象が残っていません。印象に残っているのは、この植物園全体が斜面という立地条件です。入場口の辺りの標高が一番低く、面積が約27ヘクタールある広大な植物園内を巡るには山頂方向に登るコースしかありません。往路は植物を愛でている余裕なんてありません、歩くだけで精一杯です。植民地時代の初期にはマラリヤの特効薬として知られるキニーネの原料となるキナという木のプランテーションでした。それが1861年に英国によってバラとシダを集めた植物園に生まれ変わりました。バラとシダと云うのがいかにも英国人好みですね。

園内には山あり、川あり、谷ありなので、植物を鑑賞するよりはお弁当を用意してのハイキングに向いています。入場料は94年版ではRs.100、02年版ではRs.150、11年版では大幅に値上がりしてRs.600となっています。今回の原稿を書くためにスリランカ発行の地図を眺めていたら、[〇〇の歩き方]にはHakgala Botanical Gardensとしか記載されていませんが、現地発行の地図ではHakgala Sanctuary Botanical Gardensと記載されている事に気づきました。この場所はスリランカの人達にとっては何らかの鳥獣保護区かもしれないですね。

赴任していた当時、「ハッガラ植物園」に行く時にはもう一つ楽しみがありました。植物園から東方向に十数キロ下った先にある、名前は忘れてしまいましたが山小屋風のレストランに寄ることです。此処ではLTTEとの国内紛争中であつたにも関わらず、マンゴー、パパイヤ等の南国特有の果物だけでなく、さすがに涼しい高原地帯です、季節に応じて収穫したてのイチゴやオレンジ、洋ナシなどを食べる事ができました。テラスからは庭のバラ園、谷間に広がる紅茶畑、遠くの山並みを見ながら、この店の名物のピザも食べる事ができます。ヌワラエリヤから東海岸方面又は南海岸方面への旅を計画されている方は、時間があればハッガラ植物園にもお立ち寄り下さい。

今回はペラデニヤ植物園までたどり着くことが出来ませんでした。次回はペラデニヤ植物園と周辺情報をお伝えしようと思います。

自分には当たり前と思われることが、他の人にはびっくりするようなことがあります。私たちはそれぞれ違う文化・価値観を持って生活しています。文化・価値観の違いは、それぞれが育ってきた国や民族の伝統や自然環境など、いろいろなものが影響し合って生まれてきます。ある人の「生活様式」とは、その人が生きてきた地域の人々が当たり前に行っている生活の形であると思います。日本とケニアの生活様式で面白い違いを、最近、また見つけたので紹介したいと思います。

私の両親は農家で、私も農家の一員として育ちました。私の家には、牛、うさぎ、ヤギ、犬や猫などが飼われていました。しかし、動物が「ペット」と呼ばれて飼われている国があるなんて想像したことなどありませんでした。

私の家の動物たちは私の家族にとって大切な資産であり、それぞれ重要な役割を担っていました。例えば、犬は番犬としての役割があり、猫は、ねずみなどの小動物から家族の食べ物を守るという役割があります。

とはいえ、私たち家族にも今だに忘れられない「動物」がいました。その「動物」は私たちの家族にとって、日本の皆さんが、ペットとしてより「家族」として愛おしむのと同じ存在でした。

その「動物」とはヤギの「シフィ」です。どうして「シフィ」というヤギにそんな愛情を抱くのでしょうか？ヤギは私たちケニア人にとってはありふれた動物です。沢山のヤギが家にはいました。

シフィは私に続いて弟が生まれる前の1980年に生まれました。シフィの母ヤギは、シフィを生んですぐ亡くなりましたので、シフィは母乳でなく哺乳瓶のミルクで育ちました。シフィにミルクをあげることが、私が生まれてから最初にした家でのお手伝いでした。

小さかった私と弟はシフィはすぐに仲良しになり、お互い言葉を交わすことができなかつたにも拘らず、日々、心を通わせて育ちました。私と弟とシフィは寝るときも一緒でした。シフィの寝床は私たちと同じ部屋の、私たちのベッドの下にあり、シフィと私たちは一緒に健やかな眠りにつきました。

ある日、私が幼稚園へ行こうとすると、家の周りで遊んでいた時のようにシフィが付いて来ました。そしてそのまま教室の入り口までついて来て、私が教室の席に着く様子を伺っています。先生も生徒も驚いていましたが、その時の、シフィが私を見つめる姿を今でも覚えています。その時のシフィの愛情あふれる眼差しを私は今も懐かしく思い出します。

その後、シフィは成長し、普通のヤギは1匹か2匹の子供を生みますが、シフィは4匹の子供を一度に生みました。その為シフィは村でも有名で、村の人にも愛されるヤギでした。普通はヤギのミルクを飲まない私たちでしたが、シフィのミルクは飲みました。私の兄弟姉妹はみんなシフィのミルクで大きくなりました。

シフィは20年もの間、私たちの家族と生活を共にしました。私は赤ちゃんだった時から青年になるまでの長い間をシフィと共に成長してきました。私たちの家族には、シフィがいない生活は考えられませんでしたし、シフィは私の家族と喜びや悲しみを共にする存在でした。

しかし、シフィは歳をとり、普通の生活を送れなくなりました。歯はすべて抜け落ち、草を食べられなくなりました。私たちは人間の食事を与えましたが、遂に歩けなくなり、立てなくなり、人の手助けがなければ生きられなくなりました。

シフィを家族として一緒に生活してきた私たちは決断を迫られました。私たち家族の一員であるシフィ、彼女の最後のときは迫っています。

私の母は、「最期まで静かに看取ろう」と言いました。しかし、私は苦痛に苦しむシフィをこのまま生かして毎日見るのは耐え難かったです。弟はこう言いました。「お医者さんを呼んで注射をしてもらおう。それですぐに死ぬるだろう」と。「でもそれでは、すぐに死んでしまって、魂が私たちと一緒にいられない。駄目だ」と家族全員が反対しました。

シフィは苦しんでいる…。安らかに天国へ送る方法はないのか？

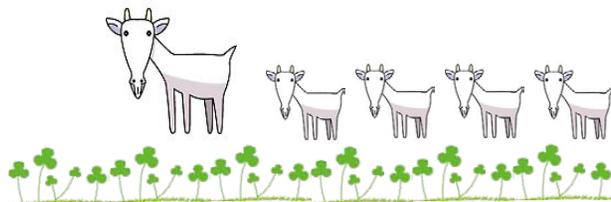
私が考えに考えてその解答を思いついたとき、家族全員は反対しました。言葉を尽くして一生懸命説得した結果、考え直してその方法を受け入れること

にしたのです。

私がやっと思いついた方法とは、家族ではない人にシフィを殺してもらって、それを食べるというものでした。

「どうしてそんなことができるの？」と皆さんは思うかも知れませんね。家族のように愛し接してきたヤギを食べるなんて！私はこう思ったのです。私たちがシフィを食べれば、シフィは永遠に私たちの血となり肉となるのです。永遠に身体の中で一緒なのです。しかし、私の母だけはどうしても食べませんでした。

私は、今でもいい考えだったと思います。シフィは永遠に私の身体の中で私を見守ってくれている気がしているのです。私の命がなくなるその日まで、シフィのことを永遠に想い続けることが出来るような気がしているのです。



## 私の四川省一人旅 [53]

### ダーゴン 草原の中の街 塔公 [1日目-3]

田井 元子

塔公から山を越え辿り着いた小さな村で、ただ道を通りかかっただけの私を家の中に招き入れてくれたお婆さん。

これまでいったいどんな人生を歩んできたのだろう。

真っ白な長い髪を三つ編のお下げにして肩の両側にたらし、小柄な可愛いお婆さんの娘時代を想像すると、亜丁の少女、稻城のシャムウ、これまでの旅の道中で出会ってきた美しく愛らしいチベット少女達の顔が次々と浮かんでくる。高齢となった今でも少女の面影を感じさせるお婆さんの若かりし頃は、きっとずいぶん美しい少女だったに違いない。今は村で暮らすお婆さんだが、かつては遊牧民のテントで暮らし、草原で馬を駆っていた時代があったのだろうか？

部屋の片隅で黙々と針仕事を続けているお爺さんとも、映画のようなロマンスがあったのかもしれない。言葉の通じないおばあさんの笑顔を見つめていると、この世にはそこに暮らしている人の数だけ、それぞれの背負ってきた人生のドラマがあるのだと、日頃は考える事のないそんな事実がしみじみと思われて、私の頭の中ではおばあさんの人生が勝手な空想でどんどんストーリーを膨らませていた。映画の断片のようなヒトコマ、ヒトコマが頭の中に浮かんで消えていき、終いには自分が出演しているヒトコマまでをすっかり頭の中に思い浮かべて、私は一人で苦笑した。

お婆さんとは殆ど言葉が通じなかったが、互いに意思を伝え合う気持ちがあれば、不思議と言いたい事は伝わるものだ。酷く訛ってはいたが、何か話しかけてくれるお婆さんが、「あなたはどこに行くの？」と尋ねているのだと理解した私がお寺の方向を指差し、顔の前で

両手を合わせ拝む仕草をしてみせると、即座に意味が通じたらしいお婆さんは顔をパッと輝かせ、良いわね！といった様子で親指を立てて見せた。こんな土地でも、下界の若者と同じ仕草が通用している事がちょっと意外だ。

この家の穏やかな雰囲気は心地よく、小さな孫娘と遊んでいるのは楽しかったが、そろそろ午後遅い時間だった。この村から再び山を越えて明るいうちに塔公の町に戻るためには、もうおいとましなければならなかった。

お寺の話題が出たのをきっかけに、それじゃあそろそろ行ってきますと仕草で伝えると、お婆さんは笑顔で頷き、孫娘が遊んでいた私の鏡を取り上げ返してくれた。

お礼を言って別れを告げた私を、お婆さんは戸口に立ち手を振りながらずっと見送っていてくれた。もしかしたら、帰る時には喜捨をお願いされたりするのかな？・・・僅かだが心の片隅にそんな考えもチラッと横切っていた私は自分を恥じた。このお婆さんに会えた事で、この村は忘れられない大切な場所となった。旅が始まったばかりの頃、ある人からチベット族には他所からやって来た人間を暖かく迎え入れる、おもてなしの文化があるのだと聞いた言葉が、つくづく本当であった事を直に体験させてもらったのだ。

家の前の道を、もう間近に屋根が見えているお寺に向って歩き出した。今朝、山の上から私を呼ぶように光り輝いていたお寺だ。

思えば道もない山道を下って、この村までやってくる気にさせられたのは、何故だかこのお寺に強く心を

惹かれたからだ。今朝は期待が外れた塔公で、ちょっとつまらない気分になりかけていた私を、神様がこの村に呼んでくれたのかも知れなかった。はるばる辿り着いたお寺は改装中なのか入り口では門の工事をしていたので、そこで働いていた土地のおじさんに入っても良いか尋ねて門をくぐり、薄暗い本堂の中にそっと足を踏み入れた。

この土地で寺を訪れる度いつも感じる事は、チベットのゴンパ(お寺)は異世界への入り口だという思いだ。一歩足を踏み入れると自分が現世から時空を越えて極彩色の曼荼羅世界に取り込まれてしまったような思いに囚われ、時には軽い目眩さえ感じるような心持になる。

そこは小さなお寺だったが、丁度夕刻のおつとめの時間に当たっていたのだろうか。寺の内部にはまだ修行中と思われる年若い青年僧が沢山座っており、その前には彼らの老師と思われる既にベテランとなった風格の僧侶が座っていた。

私が寺の中に足を踏み入れてから程なく年配僧に先行され彼らの読経が始まった。年配僧侶の声にリードされる様に青年僧らの声が後を追うそれは、まるでお経というよりは音楽のコーラスのように私の耳には感じられた。テンポの良い抑揚が強弱の波を打ち、次第に熱を帯びてくる僧侶達の声の張りが高揚感を増していく。

読経の合間には、木魚のような役目を果たす仏具の鐘の音が鳴り、大勢の僧の声がうねりながら堂内いっぱい渦を巻いて響き渡り、それはまるで目に見えない音のうねりがお寺の壁に描かれて躍動する毒々しいチベットの神々にも通じる、人の生の根源的なエネルギーのほとばしりのようなものにさえ感じられた。

その場に一人部外者としてポツンと座っていた私は頭の中に反響する僧侶達の声の渦の中で、次第に意識が朦朧とした心持になって目を閉じ、音のうねりに身を預ければ頭の芯がジワジワと痺れてくるような心地良さだ。お経のリズムに合わせてこれまでの旅の風景がぐるぐると走馬灯のように頭の中に浮かんで消えていく。

ああ、録音機があればいいのに・・・！この音を旅の思い出としてそのまま持ち帰りたい。

この読経のコーラスにはある種の音楽の熱気が人を酔わせる要素を持つと同質の、何か脳内に快楽物質を生み出す作用があるようにも感じられた。お経の言葉など一切理解できない私だが、唱えている僧侶達に

してもこのテンポの良い抑揚を持ったお経を、皆で声を合わせて浪々と唱える事はさぞ心地良いものではないだろうか。宗教と娯楽は一對をなすものでは・・・？この地を訪れてから何度も思われているそんな思いが、再び頭の中を横切った。

その時の堂内は閉ざされた暗い空間だった筈だが、目を閉じていた私の記憶の中では寺の堂内にオレンジ色の夕日がいっぱいに差し込み、一身に経を唱える青年僧たちの姿を照らしているように思えていた。

お寺の堂内から外に出た私は、まだ読経のコーラスに酔っている様な気分でぼんやりしていると、先ほどお寺に入れるかの許可を尋ねたおじさんが、「小姐、帰るのかい？」と声をかけてきた。その場を立去りたい気分だったこともあり、酔い覚ましのような気持ちで、その場で暫く話し相手をして貰った。

この辺りでも鳥葬は行われるの？

いや、この辺の人間は死んだら八美(バーメイ)に行くのさ。日本ではどうするんだい？

燃やすの。

ただ燃やすんじゃ意味がないな。鳥葬は鳥に自分の身を与える事で他の生物の役に立ち功德を積む、意味ある埋葬法だ。そうは思わないか？

男の言葉に私は深く頷いた。

ところで小姐、あんたあの山の向こうから来たんだらう？

何故知ってるの？

あんたが山を下ってくるのを見ていたよ。帰りもあの山を越えて行くつもりか？怖くないのかい？

だって誰もいないもの

狼がいるよ。

えええ!?

もう太陽の色が和らぎ始めていた。早く戻らなければ日のある内に帰れない。おじさんに別れを告げると私は早足で来た道に戻り、お婆さんには家の外からそっと別れを告げてこの村を後にした。

下界であれば然程でもない小さな山を、再び激しくハアハア言いながら登り返し、幸いにも狼に遭遇する事はなかったが、何処かで方向を間違えたらしく、辿り着いた山頂は今朝登った山と連なる別の峰の先端で、そこは山の斜面いっぱいチベット仏教の祈祷旗、ダルシが林立して三つの大きな三角形をかたどっている、塔公のシンボルともいえる神山の山頂だった。

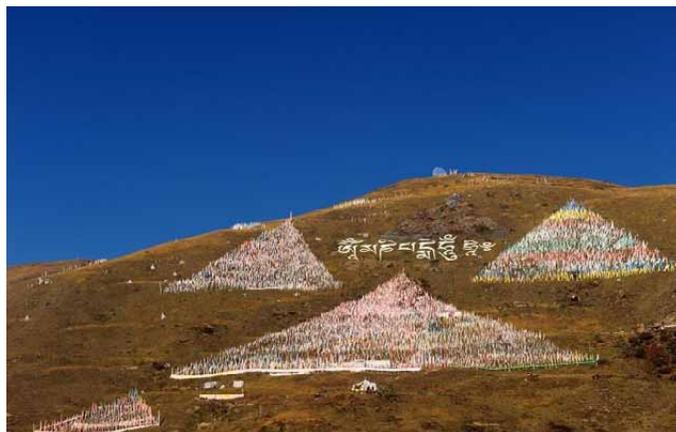
太陽がオレンジ色に輝いて、地平線の彼方にはこの朝遠くに見えていた雪山の連なりが赤く染まっている

のが素晴らしく美しい。いつまでも眺めていたかったが、太陽が沈めば辺りは直ぐに暗くなってしまうだろう。もう時間が無かった。そのまま尾根伝いに歩けば元の山に戻る事もできたが、それよりも今立っている山の斜面を斜めに下る方が早く塔公の町に戻れると判断し、私はそのまま山を下り始めた。

山の斜面に立てられた祈禱旗はびっしりとお経が書き込まれ、風にはためくたびに仏の教えを広めるという意味が込められているのだそうだが、既に薄暗くなってきた視界の中で風雨に晒されくたびれた白い布が揺れながら林立しているダルシンの群れは、異国の人間の目には異様で恐ろしく、まるであの世の世界に迷い込んでしまったような気持ちにさせられる。

こ、怖いよ……。いつしか身体が萎縮して固まっている。

だが冷静に考えれば、この場所はこの旅の間中私を守り続けてくれた神様の懐の真ん中なのだ。斜面に林立する白い幟でかたどられた三角形は、それぞれが文



殊菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩の姿を現しているのだといい、自分は正にその神様の懐の真ん中にいるのだった。何も怖い事など無いのだ。

オンマニベネホン、オンマニベネホン……

旅の間にいつの間にか覚えてしまった、チベット仏教の祈りの言葉を呟きながら、もう薄暗いダルシンの林の中を、私はゆっくりと山の斜面を下っていった。

(続く)

## ‘わんりい’への感想を頂きました

- わんりいの新年号をありがとうございました。

いつも興味深い記事が色々載っていて、引き込まれて読んでしまいます。

特に、前回に続いての張家界の訪問レポートは昨年5月に旅行した時のことを思い出しながら読みました。

また、「私の四川一人旅」は、観光ではない中国の辺境の地の人々の様子が分かり、田井元子さんのどこにでも飛びこんでいく果敢さに感心して読ませていただいております。信仰が生活そのものという今回の老夫婦のことも、心に深くしみました。(M.S.)

- わんりいの新年号を読ませて頂きました。最近は何媛さんの民話を楽しんでいます。

今月号の“鬼”の話も、とても面白かった。現代離れしていて、およそ何の役にも立ちそうでない話ですが、それを語り継いできた、ほのぼのとした素朴な民族の心を伝えているようで、毎回読んでとても楽しいです。

ありがとうございました。(K.S.)

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願いします。尚、新年度の会費の納入は、3月一杯にお願いします。また、新入会を歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし  
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの思いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

‘わんりい’の活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

- ◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆町田国際交流センターで、ご自由に取ることが出来ます

## わんりい' 活動報告1 恒例・シュワンヤンロウで2012・新年会!

2012年2月12日(日) 於: 麻生市民館料理室 参加者数: 47名

今年も例年通りのシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)の新年会が、2月12日という少々遅ればせの日取りながら開催されました。

今年の新年会も、京劇俳優の殷秋瑞さん、オペラ歌手の崔宗宝さん、国土館大学の韓シンさん・何媛媛さんご夫妻、'わんりい'中国語勉強会の講師の郁唯老師他、昨年12月開催の'つなげよう!ひろげよう!地域の「輪」と「和」'に主演された銭騰浩(笙)さん、曹雪晶(二胡)さん、林敏(揚琴)さん、国土館大学の留学生たち3名と郁先生の愛娘・香香ちゃん(中学2年生)が参加。ケーナの山下孝之さんもまだ20代で、例年より年齢層がやや下がって華やいた新年会でした。

これまでの羊肉は、多摩プラザの東急デパートで購入していましたが、殷秋瑞さんのご推薦で、鶴川駅前のマルエツで調達。これが当たりで、柔らかくとても美味しいシュワンヤンロウを楽しむことができました。

崔宗宝さんは「午後公演があるので早目に退出するから、今年は歌わないよ」とのことでしたが、和気あいあいとした雰囲気、やはり「歌いましょう!」と、「荒城の月」と「雨にも負けず」を歌って下さいました。

「雨にも負けず」は、東日本大震災支援の為に中国人作曲家によって作曲され、香港の芸能人たちが開催のチャリティショーで歌われた歌とのこと、「頑張れ!日本!!」のエールが海を越えて聞こえるようでした。

余興として、TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル団長・永瀬さんとケーナ演奏の山下孝之さんの演奏に続いて、参加者全員で「上を向いて歩こう!」を斉唱し、今年も恒例の「お笑福引」を楽しんだ後、一本締めで締めくくり、名残を惜しんで閉会しました。



山下君のケーナに合わせて「荒城の月」を歌う崔宗宝さん



右から銭騰浩(笙)さん、林敏(揚琴)さん、曹雪晶(二胡)さんと国土館大学留学生の王天陸さん

## わんりい' 活動報告2 留学生の皆さんと料理で交流

2012年2月2日(木) 於: 鶴川市民センター・第二会議室 参加者: 13名

昨年12月開催の「つながりひろがる地域の「輪」と「和」」のアンケートで、留学生との交流を望む声がかかりありました。留学生の皆さんは学業とアルバイトで、通常なかなか時間が取れないのですが、期末試験が1月末に終わり春休みに入るとのこと、急遽企画し、交流を希望する市民の皆さんに声を掛けて開催しました。

国土館大学3年生の、顧傑さん、王天陸さんと劉麗那さんの3名の留学生たちに何媛媛さんが助っ人で参加くださいました。何さんと王天陸さんは、天陸さん提案メニュー「鶏レバーの煮込み料理」と、何さん指導の「水餃子」を担当、顧傑さん提案メニューの「珍珠丸子」と「豆腐とひき肉の炒め煮」は、顧傑さんに劉麗那さんが協力ということで二



'水餃子'組と'珍珠丸子'組に分かれて作業

組に分かれ、それぞれに参加者が加わり料理の準備をしました。

準備が整ったテーブルには、劉麗那さんが日本に来てから考えたという、中華風スパゲッティやその他会のメンバーのメニュー、参加者の皆さんの好意の差し入れ等が並び、和気藹藹と料理満載の豪華なテーブルを囲んで話が弾みました。

面白かったのは、若い中国の皆さんが、水餃子の皮種を捏ねるのを怯んだことです。これまで中国の方と一緒に何回も作ってきた水餃子ですが、今回初めて、水餃子の皮の種を捏ねるのは、長年の感とコツを要する熟練の技だということを知りました。振り返ってみますとこれまでの餃子作りは、作り慣れた中国の方が捏ねた餃子の皮種をただ延ばしただけだったのですね。



留学生たちが作った料理満載のテーブル。この他にもイチゴや日本料理の差し入れや杏仁豆腐など

◀ 何さんの手許を真剣に見る留学生たち

## わんりい' 活動報告3 第6回漢詩の会

2012年2月5日(日) 10:00～11:30 於:まちだ中央公民館・6F 視聴覚室 参加者:10名

第6回漢詩の会では、前回、十分に練習する時間が取れなかった、杜甫の五言律詩「春望」の読みを1時間半の講座時間目いっぱい使用して練習しました。

私たち日本人が中国語を読もうと思う時、四声という中国語の抑揚に苦勞をします。植田先生は講座冒頭で「まずは高低にだけ徹底的に拘って読んでみよう」といわれ、詩一行目の、一声の高音部と三声の低音部の図を描かれ、その図に従って読みの練習が始まりました。意表を突く中国語の読みの指導のようでしたが、実は「高音と低音のメリハリがしっかりすれば中国語に聞こえる」という、効果的な中国語読み・実戦力アップの「目からうろこ」のご指導でした。

読みの指導の間には、この詩が遠景から近景へ目を転じる構成の妙、ようやく官位を得てこれからという矢先という時に「安祿山の変」が起り、玄宗皇帝が帝位を譲った新皇帝の肅宗の許に馳せ参じたにも拘らず囚われの身となった杜甫の無念、そして許されて、当時100万都市ともいわれた華やかな長安の、無残なまでに荒れ果てた

都の姿を眺めて嘆く杜甫の心境に話が及び、併せて作詩の上からも名詩といわれる訳をお話し下さいました。

先生の湧いて出てくるようなお話を伺う内に、私たちも知らず知らず戦火で荒廃した長安の都の丘に立つ杜甫の気持ちになり、これまでは通りいっぺんに読んでいたに過ぎない「春望」を深く味わいながら、「読み」を練習した、あっという間の1時間30分でした。

参加の皆様の希望で、次回の「漢詩の会」は4月の予定を早めて3月18日に、同じく、まちだ中央公民館・視聴覚室で開催されます(詳細22p掲載)。

中国語を勉強されている方は勿論、中国語をなさっていない方も、漢詩「読み下し」では味わえない、中国語での読みの素晴らしさ・楽しさを体験できるかと思います。

(報告:田井)



## 留学生のスピーチ II

平成23年度町田市「つながりひろがる地域支援事業」対象事業 2011年12月18日(日) 会場:鶴川市民センター・ホール 13:00~15:45  
**つなげよう 広げよう 地域の「輪」と「和」 聞いてみよう! 留学生たちのスピーチ!!**  
**楽しもう!天女達の楽曲・中国民族音楽の演奏!!** より

### 私の留学生活

国土舘大学 21世紀アジア学部4年 りゅうがイシン 劉芸縝 (遼寧省瀋陽市出身)

今日は、私の留学生活について体験した事や感じたことを話したいと思います。

私は去年の九月に日本に参りました。今は、鶴川駅近くの部屋を借りていますが最初の半年間は神奈川県青葉台にある留学生寮にすんでいました。その頃の私はいつも心細くて、一人で生活する自信がありませんでした。正直に言うと、日本に来る前の私は、親に甘えて一度も料理をしたことがなくて、炊飯器の使い方さえ分からないほどでした。

この様な頼りない私である上、しかも日本語はまだまだ十分ではありませんでしたから、日本に一人留学してきて心細くない筈はありえないでしょう? でも、神様に愛されて、この半年間は日々、一緒に留学して来た友達と過ごしました。一緒に勉強したり、料理を作ったりしながら段々、私もいろいろな生活の豆知識が身につきました。今の私は、部屋の掃除をしたり、レポートを書きながら、料理も作れるようになりました。ちなみに、私は勉強する時にはまじめですよ。

生活の豆知識だけではなくて、この一年間の留学生活はいろんな大切なこと教えてくれました。まずは、自立しなければならないことです。日本に来る前の私は親に甘えるばかりで自立しているとはいえませんでした。

実は私はどうしようもない方向音痴です。最初の頃は、いつも友達と一緒に学校へ行ったり、ショッピングしたり、十日市場から鶴川までの電車の乗り換え方が全然分からなくて、いつも町田で迷ってしまっていました。去年、まだ日本に来てひと月ほどの10月のある日、私は寝坊をしてしまって、一緒に大学へ行く人がいませんでした。たった一人で大学まで行くことを考えると絶望的に思いました。けれども考えても仕方ありませんので兎に角寮から走り出しました。意外にも町田で迷いませんでした。

その時初めて私は、いつも人に頼ってばかりではいけません! と考えました。寝坊したのは大失敗でしたがこの寝坊事件のおかげで、私は電車の乗り換え方がちゃんと分かる様になって、道に迷うことも少なくなりました。

次は、友達は大切な宝物だということです。私は大



雑把な人間で、いつも忘れ物したり、寝坊したり、遅刻したりして友だちに助けて貰っています。先日も、わんりいのみなさんと11時半開始の予定で田井さんのうちで鍋パーティすると約束していましたが、友達が迎えにきた11時20分頃まで寝ていました。そんな私を許して皆さんは待って下さいました。ここで、私の友達に、そしてわんりいのみなさんにもありがとうございますと言いたいです。いつも許してくださってありがとう、いつも助けてくださってありがとう、いつもご馳走してくださってありがとう、悩んでいる時にも、苦しい時にも、そばにいてくれてありがとうございます。

最後は困難に対して頑張ろう! ということです。留学前の私は、困難と思われることはできれば避けたい気持ちになりました。でも、今皆さんがご覧になっているのは昔の私を卒業した新しい私です。今の私はつらいことがあった時、いつもこの歌を歌います。——**月(「上を向いて歩こう」を歌う)**

この歌は東日本大震災の時、初めて聞きました。そして、日本人の強さに感動しました。この歌は日本の皆さんが困難に立ち向かう時の精神だと思います。

日本は必ず以前に増してよくなると思います。なぜなら、真冬の後には必ず春がくると信じられるからです。今後もこの歌の内容のようにつらい時にも、困難に遭った時にしても上を向いて歩こう! と思います。

ありがとうございました。

## ありがとう

国士舘大学 21世紀アジア学部3年 劉源（雲南省大理市出身）

今日皆さんに話したいのは「ありがとう」というごく普通の言葉です。

私たちは毎日の生活の中で、おそらく何度も何度もありがとうを言っていると思います。人に助けられた時、「ありがとうございます、助かりますよ」。お土産をもらった時、「ありがとうございます、いただきます」。さらに、天気予報がはずれ、外に干している服は雨に濡れずにすんだ時も、「ありがとうございます」と小さい声で神様に感謝する人もいます。

実際、私は、日本語を勉強する前にも、同じように人の好意や、やさしい気持ちにありがとうを言っていました。しかし、日本語を勉強することがきっかけで、「ありがとう」という言葉の真の意味が分かり、それからは、よいことにだけでなく、自分に降りかかる苦痛や困難にも「ありがとう」を言えるようになりました。

その訳は「ありがとう」の漢字に潜んでいます。ありがとうは「有り難う」と書き、漢字の意味で分解してみますと「有ること」が「難しい」となります。

その語源をたどって行きますと、「ありがたきもの」と清少納言の著書「枕草子」書かれています。それはある出来事がめったにない、珍しく貴重だという意味合いです。そして、中世にはいり、仏教の影響を受け、自分は仏の慈悲に恵まれた存在であると自覚することで宗教的な感謝の気持ちとして使われました。

更に、時代が進んで近世以降は感謝の意味に定着し、民間に広がりました。以上は私の話の前置きとして、少し歴史を触れてみました。私が言いたいことは「有り難う」という言葉は感謝の気持ちをストレートに伝えるのではなく仏教用語を用いて婉曲に感謝の気持ちを表現する言葉であることです。このように婉曲に自分の感謝の気持ちを表すところは本当に日本語の面白いところだと思います。

ところで、私が皆さんに是非伝えたいのはありがとうという言葉は人に勇気を与える言葉でもあると知ったことです。

繰り返しになりますが、先と同じく漢字の構造を見れば分かるように、有難うという言葉は「有ること」が「困難」だと解釈することもできます。感謝すべきものは、珍しく、美しいことばかりではなく身にかかってくるあらゆる不幸や不平、苦痛や困難も「ありがとう」と言えることです。

以前は「私には無理でしょう」となかなか積極的にな



れませんでした。ある出来事を経て、目の前に困難が生じてもありがとうございますと言えるようになりました。

その出来事は今年の3月11日の東日本大地震です。私は地震が起きた後も、放射能の問題でマスクが騒いだ時も、国に帰ることはしませんでした。在日中国人の帰国ムードに乗らず、日本に残りました。正確に言うと、一人ボッチで残されました。当時の気持ちは今でも覚えていて、外の空気も、水道の水も、テレビに映っている津波に襲われた町の姿も、全てウンザリでした。怖かったです。とても「ありがとう」を言える状況ではありませんでした。

そのようなマイナスの精神状態はしばらく続きましたが、日本人の皆様から色々親切に私の気持ちを聞いて貰えて、だんだん会話に入れるようになり、少しずつほっとした気持ちが持てるようになりました。

特に隣に住んでいる70歳くらいのお婆さんに「あんまり家に閉じこもると、駄目よ。外に出なさい。行きたいところ色々あるって言ったでしょう。」と言われた時、なんだか家族のような暖かさを感じました。

今振り返ってみれば、たぶんそれらがきっかけになって、それまでの自分を切り捨て、新しい自分へ一歩を踏み出すことができたと思います。それで初めて、東京の色々な場所に行くことができるようになりました。

ひとりで秋葉原に行き、パソコンなどを見たりしました。オタク文化などは理解でませんでした。面白かったです。

ひとりで代々木上原に行き、結局道に迷い、東京大学駒場キャンパスに入ってしまった。さすが、名門大学で学問のにおいがしました。しかし、男だらけでした。その中の一人が流暢な英語で欧米人と話をしている学生さんの姿が一番印象に残りました。その英語のうま

さにあまりにも刺激をうけましたのでこれまでの自分があまりにもものんびりし過ぎることを反省して、今は勉強奮闘中です。

渋谷のスターバックスに行きコーヒー一杯で2時間を過ごしました。スターバックスの真下の交差点は人の通行量が日本中でもっとも多いと言われています。信号が変わったとたん人々が、軍隊が衝突するように流れて行き、そのような流れに流されないためには、自己主張がどれだけ重要かと肌で感じたりしました。

以前の私は、橋を渡る前に、前方確認、後方確認、だけでなく、周りの状況も分析するいわゆる、慎重型人間でした。しかし、地震の後は、行動するかしないか迷うたびに、「たぶん明日また大地震来るかもしれない、帰

国させられるかもしれない。今のうちにやらなければならない」と緊迫感を覚えました。それから、この緊迫感を常に頭に入れており、新しいことに挑戦するときの後押しになってくれるのです。

もしこのような大きな出来事と出会わなければ、私はきっと慎重型人間のままだったと思います。きっとやるかどうかを考えるうちに逃げてしまうのだ。きっとここに立てスピーチすることもなかったと思います。

今の私は何か困難と出会った時は、焦らずに自分に言ってみます。「まず有り難うを言ってみてごらん」と。そうすればきっとピンチをチャンスになれるのです。困難が得難いチャンスを与えてくれるのです。つまり有難きものになるといえます。

## 《'わりい' 掲示板》

### ◆わりいの催し

## 第7回 中国語で読む・漢詩の会

▲日本でよく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう!

▲正しい発音で読めるように練習しよう!

✿ 7回目の漢詩の会は、「日本人に馴染み深い詩を中国語で朗読しよう」ということで、「望廬山瀑布」(李白)、「江南春」(杜牧)、「春曉」(孟浩然)、「春雪」(韓愈)、「楓橋夜泊」(張継)を資料として用意します。この中から、選んで1編乃至2編の読みを発音に拘って練習します。

✿ 漢詩は音楽です。中国語を学んでいらいっしやらない方も、是非!



■ 場所: まちだ中央公民館 6F・視聴覚室

町田市原町田6-8-1

JR 横浜線町田駅ルミネ口2分/小田急線南口5分

■ 期日: 2012年3月18日(日)

■ 時間: 10:00 ~ 11:30

◆ 4月の予定は4月8日(日)/場所・時間は同じです。

■ 会費: 1500円 ■ 定員: 20名

\* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆ お申込み&問合せ(有為楠): ☎050-1531-8622

E-mail: ukiuki65jip@yahoo.co.jp

### 【植田渥雄先生略歴】

1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業。

▶ 元桜美林大学教授

▶ 元NHKラジオ中国語講座担当講師

▶ 現桜美林大学孔子学院講師

▶ 現桜美林大学名誉教授

崔宗宝と音楽仲間による

## ♥♥♥ チャリティーコンサート ♥♥♥

～ 3・11大震災の復興願って～

2012年3月18日(日) 14:00開演(13:30開場)

海老名市文化会館大ホール

<http://www.ebican.jp/>

崔宗宝(バリトン) 劉朴(二胡) 池英壽(笛)

任燕(ソプラノ) 姜小青(琴) 陳鈺(ピアノ)

\* コンサートの収益金は「崔宗宝東日本大地震支援奨学金」に寄付されます

全席指定: 3000円(ペア券 5000円)

●主催: 崔宗宝音楽事務所

●後援: 海老名市医師会

●申込み&問合せ: 崔宗宝音楽事務所

☎046-240-0836

## 【'わりい'の原稿を募集しています】

'わりい'は、原則として、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員の皆さんの原稿でまとめられています。中国で体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなどを気楽にお寄せ下さい。

\* 紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたりすることもあります。

\* 'わりい'に掲載の記事などについても簡単なご感想をお寄せいただければ有難く存じます。

日中文化交流市民サークル 'わりい'

## ◆わんりいの催し

その道のプロに教わる

### 美味しい手作りクッキー3種と生チョコの会

講師の足立晃一さんは、長年洋菓子にかかわるお仕事をしてこられました。癖のない上品なテイストの本格的クッキーと文字通りとろける味わいの生チョコの作り方をご指導いただきます。

手づくりの美味しい味をお土産にしたりプレゼントしたりは如何？

日時：2012年3月22日(木) 10:00～

\*予定のクッキーが焼きあがるのを待って終了します。

会場：まちだ中央公民館 6F・調理実習室

〒194-0013 町田市原町田6-8-1 町田109・6F

JR横浜線「町田駅」ルミネ口徒歩3分/小田急線「町田駅」南口徒歩5分

会費：2000円(講師謝礼 会場使用料 材料費など)

定員：15名～20名(定員になり次第締め切ります)

お昼は、田井家風の牛肉のトマト・シチュウと春のサラダを予定しています。美味しいコーヒーと焼きあがったばかりのクッキーをデザートとして味わいましょう！

\*クッキーのお土産付きです。

持ち物：エプロン・筆記用具・クッキーを入れる容器

●申込み：わんりい ☎042-734-5100

E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp

## 中国を知る会・3月例会

「中国を知る会」は、まちだ市民大学2000年度の「現代中国の行方と日中関係の展望」(前期)と「知ろう、感じよう、中国の人々の暮らしと社会」(後期)の受講生によって2001年4月に発足した会です。現代中国を、会員が選んだテーマについて、いろいろな角度から学習した成果を発表し合い、情報交換しています。下記は3月の例会の内容です。今回は講師が「わんりい」会員の寺西氏ということで、「わんりい」会員も傍聴できます。

### 「大連市の日系企業の経営を預かって」

●お話し：寺西俊英氏

(元大連日通集箱製造有限公司・総経理)

●日時：3月19日(月) 18:30～20:30

●場所：町田中央公民館 学習室3・4(定員24名)

●参加費：無料

●申込み：床呂英一 TEL/FAX 042-734-3817

Eメール m-tokoro@mta.biglobe.ne.jp

寺西氏は、中国大連で日本企業の社長として2年間勤務されました。ご自分の経験に基づいて、日系企業の内容、苦労したこと、中国の企業が日本の企業と違う点、中国人について感じたことなどをお話しいたします。

## ◆わんりいの催し

スリランカはインド真下の、インド洋に浮かぶ、美味しい紅茶で知られた国です。



スリランカ人講師が、インドカレーと一味違う、本格派スリランカカレーの代表的なカレー料理3種を紹介くださいます。

さて、インドカレーとどこが違うのでしょうか？

### 〈スリランカ・カレー料理の会〉

日時：2012年4月13日(金) 10:30～14:00

場所：まちだ中央公民館・調理実習室

〒194-0013 町田市原町田6-8-1 町田109・6F

JR横浜線「町田駅」ルミネ口徒歩3分/小田急線「町田駅」南口徒歩5分

会費：1500円～2000円(講師謝礼・会場使用料・材料費など)

定員：15名～20名(定員になり次第締め切ります)

講習予定料理

#### 1. スリランカ・カレー 3種

- ①フィッシュカレー ②ダール(豆)カレー
- ③野菜カレー

#### 2. スリランカ風サラダ&デザート

(デザートとスリランカ紅茶付き)

講師からスリランカのお話を伺いながら作った料理を楽しみましょう！

持ち物：エプロン・筆記用具

●申込み：わんりい ☎042-734-5100

E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp



### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

### [3月の定例会と12月号の発送日]

◆定例会：3月12日(月) 13:30～(田井宅)

◆おたより発送日：2012年3月29日(木)です。

～どちらも、お問合せの上で自由に参加下さい～